

散逸物語『女すすみ』考

宮田 光

一

散逸物語『女すすみ』の内容を推測するための資料としては、『風葉和歌集』(以下、『風葉集』と呼ぶ)の二首の和歌があるだけである。番号順に示すと、三二・三三・五〇・二二四・二二五・三六七・四七八・五六一・六八・六九・六五三・六五四・六六三・八一六・八五四・八五五・九三九・九八六・一二五〇・一二九四・一三四九・一三五四である。この二首という歌数は、『風葉集』所収の散逸物語の中では『みかきが原』の四一首に次ぎ、第二位である。この物語が一定の長さがあり、読者に好まれていたことを思わせるものである。ところが、この物語の内容については、現在のところ、余り明らかにされていない。『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』・『散逸物語事典 鎌倉時代物語編』・『中世王朝物語・御伽草子事典』・『女すすみ』の物語内容の推測⁽¹⁾などの先行文献があるが、①左大将と前右大臣三君との結婚 ②右大将と前右大臣中君との結婚 ③中宮と左大将の姉弟(または兄妹)関係の三点以外は、どれも、登場人物の関係が正確に把握されているとは言い難い。恐らく、帝と先帝との関係をはじめとして、作者名表記を厳密に区別していないことが原因と思われる。

散逸物語『女すすみ』考

以下、それぞれの和歌から推定できる『女すすみ』の物語の内容について述べるが、『風葉集』の作者名表記は、勅撰和歌集の表記に準じて、物語の最終時点における地位(極官)によっていることを前提にして論を進めたい。以下に引用する『風葉集』の本文は、基本的に京都大学文学部図書蔵本に拠り、一部仮名遣いを改めた。(なお、名古屋国文学研究会による『風葉集』の共同研究が進行中で、現時点で調査済みの写本三〇種による本文の異同は、物語の内容の推定に関わるもののみ傍線を付して、注に掲げておく。)

1、むすめのことを左^{左大臣}にほめかし侍とて

女すすみのさきの右大臣

しる人のしるべき色にあらねどもみせばやどの梅のこずゑを

(巻一 春上 三二)

かへし

をりしらぬ心やいとゞまよひなん木だかきやどの梅のほひに

(巻一 春上 三三)

だいしらず

女すすみの前右大臣の三の君

ほしわぶる袖よりほかにおきそへて世さへ露けき秋はきにけり

(巻四 秋上 二二四)

まず三三番歌から、梅の花の咲く頃に、前右大臣(当時は右大臣か)

が左大将に娘との結婚について打診したことがわかる。「しる人のしるべき色にあらねども」からは、前右大臣が左大将に対して謙遜している気持が読み取れる。左大将の父親の方が右大臣よりも地位が高いのかも知れない。「君ならで誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人ぞしる」(『古今集』春上 三八 友則) による歌である。

それに対して三三番歌からは、高い家柄の姫君との縁談に当惑しているという、余り気が進まない左大将の様子が窺われる。

二一四番歌からは、左大将が辞退できずに結婚した相手が三君であったこと、また、袖の涙も乾かないのに、「露けき秋(飽き)」が来た、と詠んでいるので、秋になった頃には、二人の仲は冷えていたことが推測される。

2、 女のもとよりかへりてつかはしける

をんなすゝみの右大将

心さへやがてぞくらすはる霞かすみわけつるあけぼの空

(巻一 春上 五〇)

ひさしうまからざりける女のもとにつかはしける

女すゝみの右大将

かたしきにまつらんとこのさむしろをかけてしのばぬ時のまもなし

(巻十二 恋二 八五四)

返し

前右のおほいまうち君の中君

うきしづみかた敷袖に浪こえてやがて身ながらくちやはてなむ

(巻十二 恋二 八五五)

五〇番歌は後朝の歌か。「くらす」という語は、別れるのが辛くて心が暗くなる、と読ませたいのであろうが、実は、右大将が心に染まない女との仲に、重い心を抱いて帰る様子が読み取れるのである。

八五四番歌によれば、その相手の女は前右大臣の中君であるらしい。右大将は、あなたのことを思い出さない時はない、というが、詞書に

あるように、夜離れが続いているのであろう。「さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうじのはしひめ」(『古今集』恋四 六八九 詠み人しらず) による歌である。

八五五番歌は、さらに「君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ」(『古今集』東歌 一〇九三) も引いて、右大将の心変わりを責めている。前右大臣の中君も、三君と同じく、幸せな結婚ではなかった。順序からすれば、中君の結婚の方が、三君の結婚よりは早いのであろう。

3、 しのびて御覽ぜられける女にたまはせける

女すゝみの先帝のおほん歌

君があたりしばしはなれぬ心こそ我ものからにうらやまれけれ

(巻十三 恋三 九三九)

先帝の忍び逢った相手の女は誰かわからない。

4、 御心ちかぎりにおぼえさせ給けるに、いとせちにおぼされける女御にの給はせける

女すゝみの先帝御歌

はかなくも契りける哉あさぢ原はずゑの露のつねならぬよに

(巻九 哀傷 六二八)

御返し

登華殿女御

吹みだるあさぢが露のまにまづ消はつるわが身とも哉

(巻九 哀傷 六二九)

この二首は、部立が哀傷である所からみて、先帝の臨終の時の贈答歌であろう。「いとせちにおぼされける」とあるので、先帝は登華殿女御を深く愛していたのであろう。「無常の世であるのに、はかなくも将来を契ったことだ」という先帝の歌に対し、女御は、「私の方が先に消えてしまいたい」と答える。女御も先帝の愛に応えていた。しかし、先帝は崩御してしまった。

5、

先帝の御わざの夜よみ侍ける

女すゝみの中将

かぎりあればそはぬ煙をよそにみてなほ同じ世にたちや帰らん
やがてかしらおろして北山にこもりにけるとなむ

(巻九 哀傷 六六三)

先帝を葬った夜、中将は、「いくら先帝を慕っても、限界があつて、私は火葬の煙については行けない。空へ昇る煙をよそのものと見て、私はまた、前と同じ世間に帰って行くのだろうか」と詠んで、出家し、北山に籠もったという。「そはぬ煙」と似た表現では、円融院崩御のときに、藤原行成が「おくれじとつねのみゆきはいそぎしをけぶりにそはぬたびのかなしさ」(『後拾遺集』哀傷 五四二)と詠んでいる。「中将」は、男女どちらとも考えられる。先帝に目を掛けられた、上の女房かも知れない。「かしらおろす」という表現も、『源氏物語』の三例(明石入道・紫上・浮舟)のうち二例は女性であるし、『風葉集』の詞書を調べても、女性の出家を指す用例は複数ある。必ずしも男性ではないかも知れない。

6、

登花殿女御石山にこもれりときゝて、忍びてたづねまう
づとてよみ侍ける

女すゝみの左大将

これもまたいかなる道のはじめとは山しげ山猶まどふらん

(巻十一 恋一 八二六)

先帝の崩後、登華殿女御は石山寺に籠もった。そこへ左大将が人目を忍んで訪れる。この歌の「はじめ」という言葉から、この時が二人の初めての逢瀬と思われる。また、この歌は「つくば山はやましげ山しげれどおもひいるにはさはらざりけり」(『新古今集』恋一 一〇一三「源重之」)を引いているのであるが、「猶」という語は、この二人の過去に何かがあったことを思わせる。初恋の相手であったが、女は入内してしまったとか。次の歌もそのことを裏付けているように思

散逸物語『女すすみ』考

われる。

7、

むすめの女御、左大将に名立さまかへて侍りけるに、先
代かくれさせ給ひて後、登花殿の女御にすみわたると聞
て、大将のもとにつかはしける

女すゝみの内大臣

しほたるゝあまのそでのみくちはてゝいかなるうらにみるめお
ふらん

(巻十八 雑三 一三五四)

先帝の御代のこと、左大将と噂の立ったのは、内大臣の女御であつた。その噂のために追い詰められた女御は、出家してしまつた。ところが、先帝の崩後、先帝の寵愛深かつた登華殿女御に、左大将が通い詰めるようになった。「あなたの所為で私の娘は尼になって涙をこぼしているのに、一体あなたはどこで新しい恋人と逢っているのか」と内大臣は左大将に抗議しているのである。「みるめおふ」は、用例が殆どないが、「海松布生ふ」と「見る目逢ふ」の掛詞。しかし、先帝の崩御の後のことであるから、左大将と登華殿女御の噂が立つても、左大将が真野の浦に蟄居する程のこととはあるまい。そこにはまた、別の事情がある筈である。

8、

題不知

女すゝみの登花殿女御

つらきをもうきをもたどる身ともがなさてだにしはしものをお
もはじ

(巻十四 恋四 九八六)

詞書に「いまだ参り侍らざりける」というような表現がないので、この歌は入内前の歌ではない。「辛いとか情けないとかいうことがよく分からない身だったらいのに。そうだったらせて暫くの間だけでも物思いしないだろうに」。この登華殿女御の独詠歌からは、余程の窮地に立たされて思い余っている状況が推測される。

9、

登華殿女御にしるびて物申て出ける暁、温明殿のわたり

散逸物語『女すすみ』考

をすぐとて、内侍所のおぼしめす覧事もおそろしとて

女すすみの左大将

神もみよかゝるなげきにむすびけるちぎりはけふのわが心かは

(巻七 神祇 四七八)

この歌は、明らかに、現在登華殿女御である人に左大将が忍び逢った、暁の帰途の歌である。温明殿には、神器を安置する内侍所(賢所)がある。それを畏れるのは、帝に対する罪を犯しているからである。

「神も照覧あれ。こんな嘆きの中で契りを結ぶのは、昨日や今日の出来心ではない、深い因縁によるのだ」という左大将の歌である。

『風葉集』に狭衣大将の歌は数多く採られているが、~~「たゞ」~~「たゞ人におはしましたとき」と断って、作者名を「さごろものみかどの御歌」とする。また、今上帝の女御でないときは、「うき浪の院の女御」のように記す。「先帝の登華殿女御」と記されないということは、この女御は、最後まで今上帝の登華殿女御であったということであり、しかも、六二八・六二九番歌によれば、先帝の女御でもあった。

恐らく、先帝の寵愛を受けた登華殿女御は、先帝の崩後に左大将と愛し合うようになり、その後、やむを得ない事情で今上帝に召され、再び登華殿に入ることになった。左大将は登華殿女御を諦められず、女御もまた同様で、二人は薄氷を踏む思いで忍び逢ったものであろう。

『源氏物語』の、光源氏と臘月夜尚侍の関係を連想させる。

10、 左大将まのゝうらにこもりゐて侍けるころ、つかはさせ

給ける

おなじき中宮

吹すぐるおとにつけてもいかならんまのゝうらわの秋の初かぜ

(巻四 秋上 二一五)

左大将まのゝうらにこもりゐて侍ける比、まかりてかへ
るとてよめる 女すすみの中宮権太夫

君をおきて帰らぬ旅の空にだに露けかるべき袖のうへ哉

(巻八 離別 五六二)

まのゝ浦にこもりゐて侍ける比、しぐれがちなる空のけ
しき思のこす事なくて

ふりふらず時ぞともなき時雨かなうき世中にあきはてしより

(巻六 冬 三六七)

まのゝうらにこもりて侍りける比、登花殿の女御、草子
書てと申て侍けるに

あくがるゝみるめなきさはま千鳥あとかきとめんかたもおほ
えず

(巻十八 雑三 一三四九)

左大将と登花殿女御の仲が続いていることは、帝の知る所となった。

左大将は真野の浦に蟄居する。

真野の浦は、近江国の歌枕。琵琶湖西岸にあり、現在の大津市真野・今堅田のあたり、JR湖西線「堅田」の近くである。「うづらなくまののいりえのはまかせにをばなみよる秋のゆふぐれ」(『金葉集』秋 二度本二三九・三奏本二三三 俊頼)や「くもはらふひらやまかぜに月さえてこほりかさぬるまののうらなみ」(『続古今集』冬 六一八 経信)など、秋冬の景色がめであられたようである。光源氏の須磨謫居よりも都には近い感じがする。

二二五番歌によれば、初秋、中宮は左大将の身を案じて手紙を出した。その手紙を届けたのは、五六一番歌を詠んだ中宮権太夫であったのだろう。人目を憚る様子でもないのは、中宮と左大将が兄妹か姉弟だからであろう。

三六七番歌は、「あきはてし」「秋果てし」と「飽き果てし」の掛詞)とあるから、初冬の時雨の空をながめて物思いをし尽くす左大将の厭世的な気分を詠んだものである。

一三四九番歌は、それでも左大将と登花殿女御の仲が続いていることを示している。女御から「草子書て」という便りがある。『源氏物語』の光源氏の須磨の絵日記を念頭に置いて、有名な真野の浦の風物

を描いて送って欲しいと望んだのであろう。それに対して左大将は、「海藻も生えない真野の浦に、貴女と離れて逢うこともなく、上の空で暮らしている私は、暮らしぶりをどう書き留めたものか、その術も思いつかない」と断ったのだろうか。「みるめ」は「海松布」と「見る目」の掛詞、「なぎさ」は「渚」と「無き」の掛詞、「あと」は足跡と筆跡の掛詞。女御の依頼に対する左大将の返事には、逢えない苛立ちとともに、ア段を重ねた響きに甘えも感じられる。

11、 心ち例ならず侍りけるに、みかどゆくすとほくちぎら

せ給ひけるに 女すゝみの登花殿女御

この世をばいまいくかともしら雪のきえなん後の世をたのめとや
(巻十六 雑一 一二五〇)

心ち例ならず侍りけるに、御門にきこえたてまつり侍ける

女すゝみの登花殿女御

わすれずはゆふべのくもによそへてもむなしき空をそれとながめよ
(巻十七 雑二 一二九四)

二首とも雑部に入っているので、この時の病で登華殿女御が亡くなったかどうかはわからないが、病が重くなり、死を覚悟した時の歌であろう。

一二五〇番歌は、末永い愛を誓う帝に対して、「此の世にあと何日生きられるともわからない私に、死後の世も頼りにせよとおっしゃるのですか」という女御の歌。「いくか」は「幾日」と「生くか」、「しら雪」は「白雪」と「知ら(ず)」の掛詞。帝の誓いと比べると、やや温度差が感じられないだろうか。

一二九四番歌は、女御の辞世の歌かも知れない。「私の死後、思い出して下さるなら、夕べの雲を私と思って、空を眺めて下さい。『文選』巻十九に収める「高唐賦」に、先王が夢に逢った巫山の女は、「旦為朝雲、暮為行雨」と言ったという。『源氏物語』葵巻の頭中将と

散逸物語『女すすみ』考

光源氏の贈答歌、「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ」と「見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ」もこれを承けている。この歌も同じ趣である。左大将と逢えない登華殿女御は、悲しみのために重病となり、亡くなったのではないか。

12、 御心ちれいならずおぼしめされけるに、中宮にきこえさ

せ給ける 女すゝみのみかどの御歌

かぎりあらん今ひとゝきの命をも君にとどむる此世ともがな
(巻九 哀傷 六五三)

返し

をしむにもよらぬ命を今はたゞしたふにたゆる此世ともがな
(巻九 哀傷 六五四)

そして帝も、登華殿女御を失った悲しみから、後を追うように亡くなったらしい。

六五三番歌は帝の辞世の歌。「もう私には殆ど残されていない、あとわずかの命を、あなたのために此の世にとどめたい」。

六五四番歌は中宮の返歌。「私の命など、惜しむにあたらない。帝をお慕いしてそのまま、此の世の命を終わりたい」。

この贈答歌からは、死に際して信頼し合っている帝と中宮の関係が窺われる。

二

こうして、先帝・帝と、二人の帝に愛された登華殿女御は、三人とも世を去った。しかし登華殿女御は、石山で逢ってから、或いはもつと前から、左大将を慕っていたと思われる。

『女すすみ』という題名について言えば、「すすむ」という語は、

散逸物語『女すすみ』考

「女の御さまの、すゝみさまなりける」(『夜の寝覚』巻三)「あなたより進み給ひし事なれば、さすがと思したちて」(『恋路ゆかしき大将』巻五)のように、積極的に思いを寄せる意であろう。この用例は、二例とも女性のほうが積極的なのであるが、『女すすみ』というからには、まさに「女性の方から積極的に思いを寄せる恋」について語る物語でなければならない。例えば、成立年時はこの物語より下であろうが、『恋路ゆかしき大将』の梅津女君は、何人もの男性と関係を持ちながら、実は、恋路関白一人を慕って追いかけている。登華殿女御も、本当は左大将一人だけを慕っていた女性なのではなからうか。

この物語の内容について、『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』が最初に先帝と帝を混同してしまい、「散逸物語事典 鎌倉時代物語編」も「帝(先帝)」と記したため混乱が生じ、『中世王朝物語・御伽草子事典』にも「物語の全体像を復元するのは困難である」と書いてあるが、それは、作者名表記を正確に区別しなかったことから発生した誤りであると、私は考える。

一人の女性が二代の帝に寵愛されることがあり得るか、という疑問もあろうが、例がない訳ではない。

最も適切な例は、『平家物語』の「二代后」に述べられる、近衛院の後であった藤原多子であろう。多子は、大炊御門の右大臣公能の三女であるが、左大臣藤原頼長の養女となり、久安六年(1150)一月十日、近衛天皇に女御として入内し、同年三月十四日皇后となる。帝は十二歳、多子は十一歳であった。頼長と異母兄の関白忠通が不和であったため、忠通は養女の皇子中宮を入内させ、多子は天皇から遠ざけられることが多かったという。近衛天皇は久寿二年(1155)七月二十三日に十七歳で崩御。多子は十六歳であった。その後、後白河天皇を経て、二条天皇が保元三年(1158)八月十一日即位。二条天皇は太皇太后宮であった多子の入内を強引に求め、多子はやむな

く永暦元年(1160)正月に再び入内。二十一歳。その時詠んだという「しらざりきうき身ながらにめぐりきておなじ雲井の月をみるとは」という和歌が『玉葉和歌集』に入っている。

『平家物語』によれば、「天下第一の美人の聞えましましければ、主上色にのみそめる御心にて(中略)此大宮へ御艶書あり。大宮取てきこしめしもいれず。されば(中略)后御入内あるべき由右大臣家(公能)に宣旨を下さる」とあり、公卿たちも上皇も反対したが力および、多子は麗景殿に入ったという(『二代后』)。また『今鏡』によれば、「(多子は)何事も艶なる方、情多くおはしまして、御手などもうつくしく書かせ給ふ。絵をさへ、なべての筆だちにもあらずなむおはしますなる。又ほに出でて琴・琵琶など弾かせ給ふ事はきこえさせ給はねど、すぐれたる人にも劣らず、ものゝ音もよく聞き知らせ給ひたるとかや」(『ふじなみの下』)とある。多子は才色兼備の女性で、二条天皇は心を奪われてしまったのであろう。

五年後の永万元年(1165)七月二十八日に二条院が二十三歳で崩御する。多子は同年十二月に二十六歳で出家した。多子が崩じたのは建仁元年(1201)十二月二十四日、享年六十二歳であった。

この一件は世間の耳目を驚かせた、記憶に残る大事件であったことであろう。後になって、そのように、二代の帝に愛された女性を主人公として物語化することは、十分あり得たと思われる。また、実は女主人公には恋慕う別の男性がいて彼とは別れざるを得なかったこと、帝たちも女主人公もはかなく世を去ってしまったこと、などという哀切な場面があり、更に、『源氏物語』の朧月夜事件や須磨の侘び住まいを思わせる描写があれば、読者の評判も高かったと思われる。成立は『風葉和歌集』に採られていることから、文永八年(1271)以前、『無名草子』(1200~1201)に記載がないことと、多子の崩後ということを見ると、建仁二年(1202)以後ということにならう。

